

雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

縁起と迷信

ここで言う縁起とは、難しい話しは抜きにして、日常の言葉で「縁起が良い、悪い、縁起をかつぐ」などという場合の意味合いとする。寺社の由来などは扱わない。非常にたくさんある。昔からの言い伝えで、概して科学的根拠に乏しい感がある。まじない、おみくじ、占いなどにも関係する。悪いというものではない。日常生活に関係があり、該当例もあったであろうし、無視できないため、時を経ても残っている。地域が限られていることが多い。同じ言い伝えでも、地域によって解釈が異なることがある。縁起は迷信と重なった所があり、似ているが違ったところもある。縁起には良し悪し、吉凶がある。迷信は信じると害をもたらす。以下に私が耳にしたことのある事例や私の解釈を挙げてみる。縁起や迷信などの俗信を収録した書物もあるが、引用はしていない。

1、「びわの木を屋敷内に植えると病人が出る。」びわの実はおいしく、高価な果物として知られている。家の近くに植えたい気になる。びわの木は葉が密に茂り日光を遮るから、屋敷が日陰になり易く、不健康を招くのだと聞いたことがある。一理ありそうだが、葉が茂る庭木は他にもあるから、一般的な解釈としてはどうか？

2、「病院の病室などに四号室がない。」これも縁起に関係する。「四」は「死」を連想させ、縁起が悪いとされる。「四号室」は患者等が気を悪くするから避けると言う意味であろう。

3、「病人の見舞いに椿の花は不適切」と言われる。椿の花は首が折れてポロッと落ちるので、死を連想させるからであろう。

4、「病人の見舞いに鉢植えの植物は不適切」と言われる。その植物は根が付いていて、「寝付く」に通じるからであろう。

上の2、3、4は心情的に納得できる。科学的根拠があるとも言える。

5、「猫が耳越しゃ雨。」猫は手(前足)で頬や口元を撫でる習性がある。これを、猫が顔を洗う、という。猫の手が耳の後ろまで廻ると、耳を越すと言い、間もなく雨になる予兆だと言う。猫の所作が天気予報となるもので、当たった例があったかも知れない。

6、「ひのえうま(丙午)の女性は縁談に恵まれない。」干支の丙午は60年に一度巡ってくる。この年に生まれた女性の夫は不幸になると言われ、嫁の貰い手がない、という迷信で、かつて人々に浸透していた。この年の出生率は、前後の年に比べて低い。男女を問わず子を授かることを避けていたことになる。この言い伝えに科学的な根拠は見当たらない。次は2026年だが、出生率はどうなるか？

7、数人で集合写真を撮るとき「中央の人が一番先に死ぬ。」と聞いたことがある。物騒な話だが、中央には重視されている人が来るべきだという通念は理解できる。特に誰が重要という事情がない場合は、年長者を中心にせよ、という含みがあると思われる。若い者が年長者を差し置いて真ん中にいるのは僭越、という感じと、年長者が先に死ぬと言うのは、理解し易いつじつまと思う。

8、品を欠いて何だが、子供の頃「ミミズに小便を掛けるとチンポが腫れる」と聞いたことがある。私は体験していない。この言われの発端も根拠も知らない。古い時代は地面の舗装はなかったから、そう言う例があったかも知れない。女の子については言われぬ、大人にも言われぬ。直ぐには逃げられない、抵抗できないミミズは弱者であり、弱い者いじめは罰が当たるという戒めか。

縁起や迷信、まじない、おみくじ、占いなどを含め、これらは人類古来の精神的産物であり、人々に教訓、禁止、戒律、試練、勇気、希望などを与えてきた。世の中は吉ばかりではない。凶ばかりでもない。縁起や迷信なども吉凶程々にあり、世の中の一種の縮図を形造っている。一概に非科学的と決め付けず、適切に解釈することによって、より豊かな精神生活を送ることができるであろう。